

事例

a.

交流

この章で紹介するのは「交流」それ自体を目的としたワークショップです。一般的にはワークショップでは、参加者による共同作業が必要不可欠と考えられるので、どのようなものであれ、その作業を通じて参加者間の「交流」が促されるという性質を持つといえます。裏返して考えてみれば、「交流」のワークショップは、この冊子でも順次ご紹介する様々な事例の、骨子となる基本的なプログラムを示しているともいえるでしょう。「交流：異なる組織や系統に属する人や物が互いに行き来すること」は、特にまちづくりワークショップでは、参加者が相互に「情報交換」を行い、「課題を共有」し、「理解を深める」ことが、その目標となることが多いようです。そして結果的に、ワークショップのテーマに則して参加者意識のレベルアップが図られるという効果があります。またワークショップの後で、新たな活動や組織が生まれれば、それは大きな成功と言えるでしょう。

最近の神戸市内で行われた「交流」を目的としたワークショップとして、近年課題となりつつあるマンション管理組合について神戸市内の組合員が課題などを共有しようとする「神戸市マンション管理組合交流会」、環境系のNPOが相互に情報交換を行う「コミュニティサミット2002環境ワークショップ」、全国の商店街組織が集まった「全国リサイクル商店街サミット神戸大会」、子育てサークルのリーダーやサークルの立ち上げを希望する人が集まって意見交換をする「東灘子育てサークル交流会」などが実施されています。

ここでは、「緑花活動地域交流会」を取り上げ、「交流のワークショップ」のプログラムの事例をご紹介します。

緑花活動地域交流会

経緯

神戸市は2001年に「花とひかり」をテーマとして21世紀復興記念事業を実施しましたが、その際、市内で花づくりや緑化を行なう様々な団体や個人に呼びかけ、この事業を推進する市民によるネットワーク組織をつくることを提案しました。これを受けた有志により準備会が設立され、「花みどり市民ネットワーク」が生まれました。約400団体の参加がありましたが、いかんせん行政からの呼びかけで、参加意識はそれほど高くなく、縦割りの印象は否めませんでした。そして事業が終わった後、次の展開を検討する中で世話人（役員にあたる）の間で「花と緑に関する横のつながりがいい」という課題があることが認識されました。つまり、ある公園管理会は隣の公園管理会の活動を何も知らない、あるいは別の区のことをまったく知らない、同じような状況で同じような課題について試行錯誤しているのに、有用な情報が交換されることすらない、といった現状があることが分かってきました。

ワークショップの開始

このような経緯と背景をふまえ、まず最初にワークショップもどきの参加型総会が企画されました。これは、たまたま「花みどり市民ネットワーク」の総会で、100～150人といった大人数が参加されることがあったので、この時に幾つかのグループに分かれて、「花と緑に関する横のつながり」をテーマに各参加者が一言ずつ言い合ひましょうよ、という機会を設けたのです。最初としては悪くなかったわけですが、やはり人数が多すぎ、各々の意見をバラバラに言うだけで、全体としてのまとまりを得るのが難しくなっていました。

そこで、市内に6カ所ある建設事務所の管内で1回ずつ、あわせて6回のワークショップを実施すれば、各会20人ずつ参加したとしても全市で120名程度の参加者が見込めることから、月1回、約半年間のプロセスプランニングを行いました。



グループワークの様子

プログラム

プログラムについては、次頁以降で詳しく触れますが、[あいさつ] → [趣旨説明] → [グループ分け] → [グループワーク] → [発表] という流れです。このプログラムを、地区を変えて計6回実施しました。ワークショップの運営には基本的にこのネットワークの世話人があたることとし、そのメンバーであるコンサルタントの指導により、彼らにKJ法などワークショップの基本的な手法をおぼえてもらうことから始めました。また、一部行政の人に手伝ってもらうこともありました。各メンバーが運営に慣れた後、最後に、6回の成果をフィードバックするワークショップを全体で1回実施しました。なお、ファシリテーターは世話人の中で経験のあるものが担当しました。

参加の呼びかけ

呼びかけには、チラシなどのメディアを用いる方法も考えられましたが、今回は「ネットワークニュース」(会報) による呼びかけに加え、公園管理を行政の立場で担当する建設事務所のニュースでの呼びかけや、担当職員が把握している「これは」という方々に直接声をかける、という方法になりました。したがって比較的意欲のある、積極的に発言される方々が集まりました。

このワークショップでは、「花緑の活動をする人の横のつながり」をつくりだすことを目標としています。各会で地区も会場も参加者も異なりますので、同一のプログラムを6回繰り返しました。他のワークショップにも通じる基本的なプログラムですので、順に詳しく追っていきましょう。

DATA

日時：2002.11.13
 場所：東灘区・灘区
 2002.11.27
 中央区・兵庫区
 2002.12.11
 北区
 2002.12.18
 長田区・須磨区
 2003.01.08
 垂水区
 2003.01.22
 西区

緑花活動地域交流会当日

□ワークショップ開始

いよいよ開会です。通常は主催者あいさつから始めます。これまでの経緯やこのワークショップの趣旨の説明が主になります。この場合は、世話人で一番年上の方で、片寄った意見を持たない比較的バランス感覚のいい人をお願いしました。また、参加者が時間までに揃わなかったり、受付で滞ったりすることが多かったので、開会が遅れることが分かった時は、必ず開始時間になった時点で、遅れる旨を会場におられる方々に伝えるようにしました。

□グルーピング

ここでは、参加者が20名程度でしたので、5~6人程度のグループを、4から5つつくる構成とし、会場もそのように設営しました。グループ分けはアイスブレイクも兼ね、参加者の誕生日で行うバースデーサークルという方法で、グループワークの直前に行いました。

また、実際のグループワークでその作業に加わらない参加者（見学者など）がウロウロして、写真を撮ったり覗いたりするのは、大変目障りで鬱陶しいものです。6回の中でも行政職員の見学者が多い場合は、「役所グループ」をつくり、全員がワークショップの参加者になってもらいました。

□グループワーク

今回は基本的なKJ法に少し工夫をして、RYG形式を取り入れて行いました。つまり花緑の活動で「今までで苦しかったこと、辛かったこと」を赤色（Red）、「今までで良かったこと、楽しかったこと」を緑



色（Green）、「こういうことを踏まえて、今後こんなことをしたい」を黄色（Yellow）のふせんに、それぞれ記入してもらう、という形式です。このことにより、整理がしやすくなるのと、参加者が自分の意見を明確にしなが記入できる、などのメリットがありました。

また模造紙上では、色毎に配置をまとめ、



SCHEDULE

09:30 ミーティング

および
会場設営

30
min.

10:00 開始

あいさつ

5
min.

10:05 趣旨説明

5
min.

10:10 グルーピング

10
min.

10:20 グループ

ワーク

60
min.

11:20 発表

25
min.11:45 まとめと
振り返り10
min.

11:55 おわりに

5
min.

12:00 終了

その中でさらにグルーピングして整理し、その関係性が分かるように整理しています。今回のテーマでは60分の時間で、十分にまとめることができました。

□発表

グループは6つ程度でしたので、各班3分計18分、余裕を少し見て、25分間の時間配分としました。発表は長引くことが多い

ので「あと1分」のフリップを、参加者に見せつつ発表者に見せる、という方法をとりました。こうすると、会場に笑みがこぼれ、大体時間内におさまります。なお各グループのまとめの模造紙は、壁に貼りだしておき、参加者が確認できるようにしておきました。

□まとめと振り返り

ファシリテーターがおおよそ3分程度で、全体の整理をし、簡潔にまとめました。今回は、ワークショップとしては1回で終了するプログラムでしたので、その成果をどう活用するか、という点に重点をおいて説明しました。



■ワークショップの結果とフィードバック

同一プログラムを6箇所で開催した結果、「犬猫と共存する方法」「公園を活用する方法」「他の団体と交流する方法」「活動をする仲間を増やす方法」「花や緑にもっと詳しくなる」という5つの大きなテーマが見えてきました。そこで、この成果を組織全体にフィードバックさせるために、100人が参加したネットワークの総会の時に、ワークショップを実施しました。

■ワークショップの展開

初年度の活動は以上ですが、次年度にはこの成果から得られた5つのテーマをもとに、各テーマ毎の5回のワークショップと、1回の「まち歩き」を実施しています。そしてさらに次の年度（平成16年度）は、4回のワークショップと2回の「まち歩き」を実施することになっています。毎年同じことをするのではなく、新しい展開を求めるように工夫しています。

■感想

平均すれば2ヶ月に1回のペースですが、3年継続して進めており成果も着実に上がってきているように感じています。今後は、これまでに挙げられた課題への対応や、ワークショップやまち歩きを通じた会員の連帯の強化、活動する市民の意見を集約することによる政策提言などに展開していきたいと思っています。

□ 大人数ワークショップ

ワークショップでは、1グループの人数で6~8人、全体が6グループ程度で40人前後が適当な規模だと言われています。これを超える規模になると1グループの人数を増やすか、グループの数を増やすしか方法はありません。グループの人数は、しっかり聞き取りができて話し合いが成立することが重要で、経験的にはスタッフを含めて12人程度が限界です。グループの数は、それに比例して全体での発表に要する時間が増える点が問題です。参加者の集中力の問題や、グループワークの時間の確保を考えるとあまり長く割くことはできません。またグループ数に応じて一定のスキルを持つスタッフを多数確保するのは、実は大変です。やはり10グループ程度がひとつの目安でしょう。

神戸市内で行われた大人数ワークショップの事例のひとつに「神戸市マンション管理組合交流会」(H.15.3.約200人)があります。当研究会で運営をお手伝いしましたが、全員を収容できる部屋がなく2ヶ所に分かれての進行で進み具合に差が出たり、部屋の移動に相当の時間が必要だったり、欠席や飛び入り参加の人数も半端ではなくグループの人数や参加者の組み合わせについて調整がうまくいかなかったり、大人数ならではの進行の難しさを体験しました。プログラムでは、まず4~5グループ程度で一旦発表を行ってまとめ、次に全体という2段階にすることで発表の単位を小さくしました。またグループワークと平行でスタッフがKJ法の整理をすることで、限られた時間で2つのテーマに取り組む方法をとりました。参加者の評価は比較的高いものでしたが、「十分に話し合えなかった」とか「もっと話したいことがあった」といったような声もあり、反省と工夫の余地を感じています。

ワークショップではグループの話し合いと全体での分かち合いがともに重要ですが、大人数の場合は特にプログラムによる配慮が必要と言えそうです。